

あ と が き

ここ十年来、いろいろな機会に、「近代化」という言葉に数多く接しられたと思う。それは、現在のわれわれの社会が何等かの程度で、全世界的なスケールをもつ変動の中にあり、しかもこの変動が、各国において速度や様式ないしは志向目標の建て方等の違いを含みながらも、ほぼ同じ方向に向っていると思われる状況にあることを、指摘する社会の総括的な表現なのである。ところで「近代化」という言葉を、もう少し広げて考えると、近代化イコール西欧化として、わが国の場合には、明治維新の文明開華以降の歩みが、それに該当することになるだろう。しかし現在、使われている近代化概念は、その意味での近代化に対して、もっと大きな視野と洞察を必要としている。つまり西欧化以上の、世界全体に見られる社会変動の公約数的な指標を抽出し、それによって全世界的関連の中で社会の現状と帰趨とを看取し、かつ社会の方向づけに自覚的に参与する道を示唆しようとするものである。このことは、われわれが住んでいる社会の実態を見究めてゆく足場を確保させ、同時にまた、社会のあるべき姿、ないしは逆に是正すべき姿を予想して、これから人間が生きてゆく社会のあり方を見出すのにも役だつであろう。そのような責任をもつべき社会というセットの中で、われわれは哲学の研究に励んでいる。従って哲学する足場を、現実的に見据えることに、この小冊子もいくらかの寄与をなすと思う。

なお、この雑誌の作成に当っては、関西大学経済・政治研究所から、研究双書の一部を特に抜粋するという好意ある配慮と諒承をえた。記して感謝の意を表しておきたい。